

ダイビングのすすめ

谷川 ゆみ子

田中病院パート勤務助産婦(大阪府茨木市)

出会い—ダイビング—人

7年前、私はミクロネシアという国で助産婦として働いていた。そこは珊瑚でできた小さな島で、周囲を取り囲む海の色といったら、この世のものとは思えないほど透明なエメラルドグリーン。見つめていると吸い込まれていきそうだった。

この海の下にはどんな生きものが住んでいるのだろう。今まで海といえば、波打ち際でばちゃばちゃ遊んでいただけの私であったが、その時初めて、「潜ってみたいなあ」という誘惑にかられた。

4日間の講習と実践練習の後、晴れてライセンスがもらえるのだが、私は泳ぎがうまくはない。少し心配ではあったが、実はダイビングは泳げなくても大丈夫だとのこと。ダイビングスーツやタンクを背負う時に着用するベストのようなものが、かなりの浮力をもっているのです、そのままでもちゃんと浮いていられるからである(実際私はダイビングを始めてからのほうが、泳ぎがうまくなったような気がしている)。また、心配していた装備の重さも、海に入れば全く感じなくなってかなり楽に海中遊泳できる。

さて、晴れて免許を取得。ダイビングを始めると、実に多くの人々との出会いが待っていた。今まで一緒に潜った最高齢の方は、78歳のおばあちゃん。船の上ではちょっと危うい感じがして、大丈夫かなあと思っていたのだが、海に入ると、これぞまさしく「水を得た魚」。人魚ながらに遊泳されている姿の、なんともかっこよか

ったこと！ 彼女は40歳からダイビングを始めて、今も毎年2回は海外で潜っているというお元氣な方で、なんて素敵なんだろうと感動してしまった。スキューバーダイビングは、その気になれば一生継続していかれる趣味ということがわかり、かなり得した気分であった。

その他、ダイビング好きが昂じて沖縄に就職してしまったナース、海外移住してしまったOLさんなど、いろいろな人たちとの交流もあり、これらの出会いは、かなり新鮮で楽しいものだった。

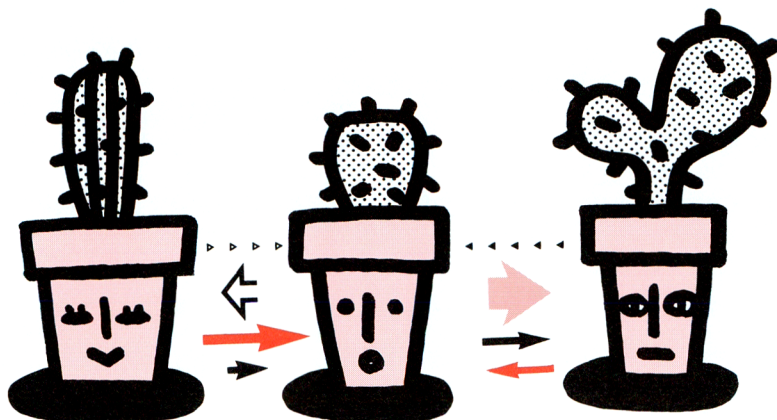
神秘の世界—海中遊泳

大小さまざまな色とりどりの珊瑚。そのまわりで遊ぶ小さな魚たち。そう、海の中で遊泳しながら、タコが岩場でひなたぼっこをしているのを見たり、海ガメと遭遇したり。海上からでは決して目にすることのできない数々の生命が、そこではキラキラと輝いている。それぞれの生物が各々の習性やテリトリーを持ちながら、共存共生している様は、それだけで美しい。日々何かに追われ忙殺されている自分が、おかしく思えたりする。

海の中は、実にゆっくりとまったりと時間が流れ……否、時間の流れは全く存在しないのかもしれない。魚やイルカたちに混じってゆっくりと泳いでいると、自分も大自然の中の一匹体に過ぎないと思い知らされるのである。それを認識するために、私は潜っているのかもしれない。

危機一髪——危険なことも確かにある

楽しいとは言うものの、危険なことも確かにあ



る。

延べ本数にして50数本のダイビング経験の後、パラオ諸島でダイビングをしていた時のことだった。視界は良好、潮の流れも緩やかで、順調に30分間のダイビングを終えて浮上準備にかかった。ダイビング中は深度により少しずつ水面に向かって上昇していくのであるが、見ると、同一パーティーの人々が、インストラクターと一緒に、どんどん急上昇していくではないか！「あんなに急に上昇したら危険だなあ」と考えていたその瞬間、自分のボンベからのエアがほとんど出なくなってきたのだ。「げげっ。まずい」。実はその日、私の使用している残圧計の具合が悪く、正しい空気残量を示してくれていなかったのだった。そうしている間にも、みんなとの距離はどんどん離れて行く。空気はほとんど出なくなり、徐々に息苦しくなり、いやな汗が流れてきた。

「これはかなりまずいかもなあ」、「なんだかぼへっとしてきた」、「ここで終わるかもなあ」。意識が遠のくその寸前、上昇して来ない私に気付いたパーティーのメンバーが引き返してくれ、エアを分けてもらいながら急浮上。

後の話によると、“急激に浮上している”と私が思っていたメンバーたちは、実は正しく浮上していて、私はかなりめずらしい縦の潮の流れに巻き込まれて、どんどん深いほうへ、深いほうへと

引き込まれていったそうである。海は雄大であるが、やはり甘く見てはいけない。そんな潮の流れが存在するということも知らなかったし、ダイビング器材の点検も甘かった。

ダイビングに限らず、事故は種々の悪条件が重なった時に起きる。メンバーが私の遅れに気付いてくれていなかったらと思うと、ゾっとする。海は雄大で生命の宝庫であるが、やはりそこは大自然、舐めてはいけない。人が真摯な態度で海に挑む時だけ、海はやさしく、その姿を見せてくれ、包んでくれるのだと思う。

ダイビングのすすめ

もしもみなさんが旅行が好きで、あちこち出掛けているのなら、今度は少し視点を変えてダイビングに挑戦してみませんか？ おいしいものを食べて名所を巡ったり、ショッピングも楽しいけれど、その海にはそこにしか棲んでいない生物がきつといるはず。旅行の楽しみ方もぐっと広がります。

私は生涯、潜ることができなくなるまでずっと、このスキューバー・ダイビングを続けていきたいと思っています。

次回はスケッチターノ・潤子さんにバトンを渡します。

(たにかわ・ゆみこ)